広島西ロータリークラブ　会員のロータリー基礎研修１

「一般奉仕概念」

ロータリアンのみなさんこんにちは。皆さんにとってロータリーはどのような意味があるでしょうか。ロータリーは皆さんのためになっているでしょうか。それぞれ異なるご意見がおありだと思います。ロータリーは個々のロータリアンの知性に基礎をおく団体で、多種多様な意見なり主義主張を認める世界ですから、皆さんそれぞれの選択を尊重します。しかし、その前提として、ロータリーとはこういうものだ、という基礎的なロータリー情報を、皆さんの選択の前に、まずはクラブの責任としてしっかりお伝えすることが必要です。

これをクラブが怠れば、皆さんには選択の余地はなく、ロータリーは単なる奉仕団体になってしまうか、飲食を共にして遊びを楽しむだけの団体になってしまいます。何年ロータリーの会員でいても、ロータリーのことがよくわからないままになってしまいます。新会員に質問されても答えられません。このようなことを、これから仲間になる未来の会員に味わわせないためにも、クラブは会員の教育という責任をしっかり果たさなければなりません。

クラブには会員を教育する責任があるということは、ロータリー章典にも、「クラブは、会員に対し、ロータリー情報、ロータリー教育、リーダーシップ研修を提供するためだけの例会を定期的に開くべきである」という記載があることからも明らかです。ロータリーは奉仕する人を育てる団体であるという表現もあります。しかし近年は、「難しいことはいいじゃないか」と、ロータリー教育を面倒なものとして遠ざける風潮が強くなり、ロータリアンの多くは日本人の得意とする同調圧力に屈して、日本のロータリークラブの多くがロータリー教育をおろそかにしています。皆さんの意味あるロータリーライフを支援するはずのクラブが、逆にまるで金太郎アメのようにロータリーがよくわからないロータリアンを創り出しているとしたら、それはどこかで改めて、クラブの輝かしい伝統と、その先にある未来を築いていかなければなりません。

そこで、ロータリアンとして知っておくべきロータリー情報を、皆さんが簡単に理解できるような形で提供するため、今回の研修を実施することにしました。

今日はその１回目で、「一般奉仕概念」についてお伝えします。皆さんは「一般奉仕概念」という言葉をご存じでしょうか。これは 1900 年代初めに確立され、今でも有効であるロータリーの奉仕概念そのものなのですが、ロータリアン必携とか入門書、あるいは My Rotary などの情報ソースを見ても、この奉仕概念の説明はありません。後で詳しくお伝えしますが、近年は、RI がロータリーを世界中で知名度が高い奉仕団体にしたがっていることが様々な出来事からうかがえます。そのため、RI は「一般奉仕概念」がどちらかというと邪魔なのだと思われます。しかし、RI に対して自治権を持つ独立したクラブとして、このロータリーの本質とも言える概念は、しっかり会員に伝えていかなければなりません。申し添えますが、この奉仕概念を「一般奉仕概念」と名付けたのは小堀憲助です。以後はロータリーの奉仕概念を「一般奉仕概念」と呼びますのでご了承ください。

この研修で「一般奉仕概念」がロータリーの本質であるということが理解できれば、「そういうことだったのか」と、これまで腑に落ちなかったことが解決すると思います。是非ご注目いただければと思います。

それでは内容に入ります。

まず、一般奉仕概念はどのように生まれたのか、ロータリー創立から一般奉仕概念の確立までの流れをふり返ってみます。

ロータリーは、1905 年にポール･ハリスがシカゴロータリークラブを設立して生まれました。その時のクラブの目的を示す定款がこれです。

第 2 条 目的
目的は以下の通りとする。
1. 会員の事業上の利益の促進
2. 通常、社交クラブに付随する良き親睦とその他の特に必要と思われる事項の推進

ここからわかるように、最初のロータリークラブは会員同士が仲良くして助け合い利益を得ようという、相互扶助と親睦を目的としていました。仲間同士の有利な条件による取引が義務づけられ、実際、ロータリークラブの会員になると儲かりました。これは、当時の商道徳が乱れきった激烈な競争社会シカゴで、地位も学歴もない農村出身の中小企業経営者であった会員たちが生き残るために必要なことだったのですが、自分たちだけ儲けるということに、それはロータリーのエゴイズムではないかという外部からの批判もありました。そこで、翌年の 1906 年には、この定款第 2 条に、次のように、クラブ所在地であるシカゴ市に対する対外奉仕らしきものが追加されました。そして、1907 年には、公衆トイレ設置運動に関わっています。

3．シカゴ市の最大の利益を推進し、シカゴ市民としての誇りと忠誠心を市民の間に広める

しかし、この頃の対外的奉仕というのは理論的に整理されたものではなく、何となくいいことをしなければならないのではないか、というレベルのものでした。

こんなロータリークラブに、しっかりとした奉仕概念をもたらしたのは、1908 年に入会したアーサー･フレデリック･シェルドンでした。シェルドンの専門は経営学で、科学的なセールス手法を教える学校を経営しており、その資格でロータリークラブに入会しました。

当時、会員は他の会員と親睦でつながり、例会では相手の立場になって職業上の相談に乗っていました。これを「相互扶助」と呼んだわけですが、シェルドンは相互扶助は決して拝金主義的なものではなく、その裏側には、人に優しくするという「奉仕の心」が存在していることを発見しました。シェルドンによって、このときロータリーは「奉仕」すなわちサーヴィスという概念を得ました。

言うまでもなくロータリーはアメリカ発祥ですから、全ての文献は英語で書かれています。世界のロータリアンはそれを自国語に翻訳して理解するわけですが、ロータリー思想が日本にもたらされた当時、サーヴィスを「奉仕」と訳したことで、実は、ロータリーが非常にわかりづらくなりました。

というのは、日本語の「奉仕」という言葉には、値引きする、おまけするなど、タダで施しを与えるというような、滅私奉公的なニュアンスがあるからです。もともとのサーヴィスという言葉は、そういうものではなく、「世のため人のために尽くすこと」というような意味ですから、この日本語訳は大変な誤訳という認識を持たれ

てもいいかと思います。

さて、シェルドンの話に戻ります。シェルドンは、この「相互扶助」を、奉仕の心を持つ会員による職業上の「奉仕の実践」ととらえて、これを「職業奉仕」と定義しました。そして、会員が社会で行う様々な活動は、利潤獲得のためだったとは言え、これも「奉仕の実践」であるとしました。これは後になって「社会奉仕」と名付けられます。さらに、クラブ運営においても、会員同士が助け合い、親睦の場である例会を運営することも、クラブや他の会員のための奉仕の実践であると見て、これを「クラブ奉仕」としてまとめました。

このように、ロータリークラブは「奉仕」を目的としており、会員が例会で「奉仕の心」を養い、それを職場で、社会で、クラブ運営で実践するのだという、ロータリーの奉仕の理論的な説明を行ったのです。これを「一般奉仕概念」と呼びます。

以上のように、現在のロータリーの奉仕概念である「一般奉仕概念」は、ロータリー創立の 1905 年からたった数年の間にロータリーにもたらされました。

ここで、「一般奉仕概念」をもう少し詳しく説明しておきます。

ロータリークラブの会員は、例会で他の会員と親睦を図る中で、人に対して優しくするという心を養います。「人に優しくする心」を「奉仕の心」と呼びます。例会で「奉仕の心」を養うという「自己教育運動」がロータリーの本質です。自己教育によって「奉仕の心」を養うには、2 つのことが必要です。

まず、各会員が、例会の場は自己教育の場であるということを自覚し実践しなければなりません。ロータリーの大原則は「平等」です。私たちが身を置く一般社会には、様々な上下関係、経済力の差、年齢の差、ジェンダーの差、主義主張の相違などが存在します。しかし、ロータリアン同士はみな平等であり、平等な仲間として接することが重んじられます。例会はそのような平等なロータリアンが集う場所です。平等だからこそ親睦も保たれます。従って、例会には、一般社会に存在する様々な「不平等」を決して持ち込まず、平等な仲間として接することが要求されます。しかし、これは多くの方々にとって大変難しいことです。それまで地元の大企業の社長として接してきた方、あるいは、他の組織では後輩にあたる方に、例会で出会った時は平等な仲間として接する、というのは、なかなか難しく不自然に感じることかもしれません。しかし、一般社会の上下関係を忘れ、仲間として気軽に「こんにちは！」と笑顔で気軽に声を掛ける。また、決して先輩面（づら）をしない。そういうことができる自分になれるよう、例会で自分自身を教育することが、個々のロータリアンに求められています。

2 つめは、このような会員の自己教育をクラブが支援することです。今日お話ししているような、ロータリーの本質に関わる情報を、明確に、現在の会員だけでなく、将来の会員にも伝え、伝承していけるような仕組みを、クラブの責務として整備しなければなりません。

以上 2 つの条件が満たされれば、会員はロータリーに関われば関わるほど「自己教育」に成功し、「奉仕の心」、すなわち人に優しくする心を養うことができます。そして、職業人としても人間としても成長するのですが、このことが実はロータリーの思想を受け入れたロータリークラブ会員にとって最大の利益だと思います。

さて、このようにして「奉仕の心」を自らの中に養ったロータリアンは、それを外の世界に放流していかなければなりません。それが「奉仕の実践」です。それはまず、職場において実践されます。例会で養った「奉仕の

心」を、まずは自分の職場に持ち帰り、社員、顧客、関係者、誰に対しても優しく平等に接します。人間は自分の利益が大事な動物ですが、同時に他人のことも考えて、利己と利他のバランスを意識して職業を行います。これは業界の倫理水準を高め、ひいては世界を良くすることに繋がります。これが後に「職業奉仕」と名付けられたロータリーの金看板です。

さらにロータリアンは、「奉仕の心」を職場以外の場でも実践しなければなりません。例えば、街を歩いているときに困っている老人がいたら声を掛けます。人間にも職業にも上下はありません。一般社会では職業に序列を付けがちですが、それはロータリーでは認められません。ロータリアンは飲食店では「ごちそうさま」と挨拶します。電車やバス、タクシーに乗ったら、降車するときに「ありがとう」と笑顔で微笑みます。家族に優しくします。こういうことは「奉仕の心」があれば、決して強制されることなく自然にできるはずです。これらを後に「社会奉仕」と呼ぶようになります。

クラブ運営に関しては、平等の原則のもと、他の会員を助け、仲間同士の親睦が維持されるように行動しなければなりません。これは後に「クラブ奉仕」と名付けられます。

このように、「一般奉仕概念」とは、ロータリークラブの会員が例会で養った「奉仕の心」を、職場や社会、クラブなど、様々な場で実践することです。ロータリーの奉仕は、今では「職業奉仕」「社会奉仕」「クラブ奉仕」また、その後追加された「国際奉仕」「青少年奉仕」など、それぞれ別個の奉仕として捉えられていますが、これをひとくくりにして「一般奉仕」と呼びます。「一般奉仕」は時代によってその形を変えます。例えば、初めてロータリーの奉仕が体系化されたときは「四大奉仕」として 4 つの奉仕部門でしたが、現在は「五大奉仕」になっています。これらの奉仕部門のひとつひとつを理解しようとすると、ロータリーは非常にわかりにくくなります。そうではなく、ロータリーの奉仕は「一般奉仕」であり、それが時代と共に四大奉仕、五大奉仕と、形を変えているのだと理解すると、とてもシンプルに理解できます。

余談ですが、シェルドンはこの「一般奉仕概念」を明確に表現する言葉を残します。それは、“He profits most who serves best.”「 最もよく奉仕するもの最もよく報われる」、という言葉です。現在では全てのジェンダーに平等にとの配慮から、主語が He から One に変わり、“One profits most who serves best.”となりましたが、これはロータリーの標語のひとつになっています。奉仕すれば儲かる、とも取れるこの表現は、非常に即物的ですが、シェルドン自身は、奉仕の実践によって得られるのは、精神的な満足感など利益だけではないことを想定していたと言われています。ただ、当時のロータリークラブの会員が実業家であり、奉仕の中心が職業奉仕であったため、彼らの関心を引くために敢えてこのような表現にしたと言われています。

さて、このように、1908 年に入会したシェルドンがロータリーに「一般奉仕概念」をもたらしたのですが、この後ロータリーはとてつもない混乱の時代を迎えることになります。ここからはロータリー分裂の危機を招いたこの混乱についてお話しします。

「一般奉仕概念」を持ったロータリーは、職業奉仕を中心とした奉仕団体となりましたが、それまで親睦と相互扶助でやってきたシカゴクラブでは、奉仕というものに対する反発も強く、これまで通り親睦だけでいいではないかと主張する「親睦派」と、いや、これからは奉仕だ、と主張する「奉仕派」が、クラブの中で摩擦を起こしたのです。奉仕概念を積極的に普及させようとしたポール・ハリスは、この摩擦の責任を取って、第 4 代目会長を任期半ばで辞任しています。

しかし、ポール・ハリスは、これまで内向きだったロータリーが将来発展していくには、シェルドンの説くような奉仕をする団体にならなければならないと確信していました。そこで、当時アメリカで誕生していた複数のロータリークラブを集めて、現在の RI の前身である「全米ロータリークラブ連合会」を結成し、シェルドンと共に「職業奉仕」を第一とする「一般奉仕概念」を普及させていきました。これは 1910 年のことです。1912 年にはアメリカ以外に生まれたクラブも含めて「国際ロータリークラブ連合会」が発足し、「一般奉仕概念」は国際的にも普及していきます。その結果、ロータリーは「職業奉仕団体」であるという伝統が世界中で築かれ定着していきました。

しかしその一方で、1912 年頃から、アメリカ各地では、積極的に身体障害児対策や災害救援、水害援助など、いわゆる「社会奉仕」を重視するクラブが増えていきました。さらに、1914 年には第一次世界大戦が勃発し、イギリスのロータリークラブは戦争避難民救済活動を開始し、これはその後「国際奉仕」と名付けられます。

すると、ロータリーの奉仕に関して、ロータリーは「職業奉仕」を行う団体であるという伝統的な考えと、いや、ロータリーは「職業奉仕」だけではなく積極に「社会奉仕」を行うべきだという考えが激しく対立するようになり、これがロータリー分裂の危機を招きました。混乱の理由は明らかで、ロータリーがどのような奉仕をする団体なのかが公式に明文化されていなかったことです。混乱を収めるには、奉仕を明確に規定する必要がありました。

それが行われたのは 1923 年のことでした。この年の国際大会で採択された決議、通称「決議 23－34」がそれです。

「決議 23－34」の冒頭にはこう書かれています。

「ロータリーにおいて社会奉仕（Community Service）とは、ロータリアンのすべてがその個人生活、事業生活、および社会生活に奉仕の理念を適用することを 奨励、育成することである。」

これはまさに「一般奉仕概念」を端的に説明した部分です。ここに「一般奉仕概念」は公式にロータリーの奉仕概念になりました。そして、この記述こそが、それまでのロータリーの混乱を収めるものだったのです。それはどうしてか説明します。

「決議 23－34」の正式名は、「社会奉仕に関する 1923 年の声明」です。一見、「社会奉仕」のことを述べているかのように思われますが、そうではありません。この部分をよく読むと、「社会奉仕」は、個人生活、事業生活、および社会生活において実践されるものだと書かれています。つまり、ここで「社会奉仕」と呼ばれているものには、私たちが考える狭い意味の「社会奉仕」だけでなく、「職業奉仕」も含まれているのです。従って、「決議 23－34」は、単にいわゆる「社会奉仕」に関してではなく、ロータリーの奉仕全般について定めたものであり、「社会奉仕」も「職業奉仕」もロータリーが行う奉仕であることを明確に表現したものでした。そして両者が認められたことで混乱が収まったわけです。

以上、ロータリー分裂の危機を招いた混乱とその終息についてお話ししました。1923 年、1905 年の創立からたった 20 年弱で、このような混乱を経て、「一般奉仕概念」はロータリーの公式な奉仕理論として確立して現在に至っています。

ここである疑問が浮上します。1923 年に確立した「一般奉仕概念」は今どこにいったのか？　ネット検索するとたくさん出てきますから存在することは明確なのですが、一部のロータリー入門書や RI のウェブサイトである My Rotary には全く記載されていません。言ってみれば、表舞台から裏舞台に追いやられたという感じです。実はロータリーにとって大きな功績を残したシェルドンの文献も、表舞台からまさに「抹消」されています。そのため、このような研修の形などでクラブが会員に伝えなければ、会員は「一般奉仕概念」という言葉さえ知らないまま何年も過ぎてしまいます。それが公式なロータリーの奉仕概念であるにもかかわらずです。

なぜこのような状態になったのでしょうか？

1927 年には「一般奉仕概念」が示す一般奉仕が整理されて「四大奉仕」という言葉が生まれました。その後、ロータリーは「一般奉仕概念」を理解し受け入れ、真剣に「四大奉仕」を実践するロータリアンによって支えられ発展していきます。

しかし、少し流れが変わってきた起点は、1928 年のロータリー財団の設立です。最初は小さな財団でしたが、第二次大戦、ポール･ハリスの逝去を経て、非常に資金力のある財団に成長していきました。すると、ロータリー財団の膨大な資金をどう使うかが問題となってきます。これを担うのは、ロータリー財団の管理団体である RI です。

そして 1978 年、RI は、財団の資金を使う大規模な保健･飢餓追放･人間尊重プログラム、通称 3－H プログラムを発表し、1980 年から推進していきます。これは現在のポリオ根絶運動に繋がるプログラムで、ここから現在に至る RI の変化が始まりました。というのは、これは決議 23－34 によって公式に定義された RI の役割を逸脱するものだったのです。

決議 23－34 は次のように RI の目的を明記しています。

> 3）RI は次の目的のために存在する団体である。
> a）ロータリーの奉仕の理想の擁護、育成および全世界への普及。
> b）ロータリークラブの設立、激励、援助および運営の管理。
> c）一種の情報交換所として、各クラブの問題を研究し、また、強制でなく有益な助言を与えることによって各クラブの運営方法の標準化を図り、社会奉仕活動についても、既に広く多くのクラブによってその価値が実証されており、RI 定款に掲げられているロータリーの目的の趣旨にかない、これを乱すような恐れのない社会奉仕活動によってのみ、その標準化を図ること。

これによると、RI はロータリークラブを支援し、強制ではなく助言によって運営方法の標準化を図る団体であって、自らが奉仕を主導することは想定されていないのです。それにも関わらず、3－H プログラムは RI が主導する奉仕活動だったので、ある意味、「決議 23－34」に反していたのです。

この矛盾を解消するには、RI は「決議 23－34」を抹消するしかないわけですが、これは国際大会決議なので RI 理事会が勝手に抹消することはできません。そこで、手続要覧などの公式文書に記載しない、つまり、ロータリアンの目に入らないようにする努力を始めました。RI は 1984 年から何度も「決議 23－34」を手続要覧から削除し、そのたびに、主に熱心な日本のロータリアンたちの努力で復活しています。

このようなわけですから、現在 RI は「決議 23－34」について表舞台で解説することはありませんし、そこに規定されている「一般奉仕概念」についても、RI 主導の奉仕活動に反するために言及することがなくなったのです。

「一般奉仕概念」を明確に規定する「決議 23－34」は、1923 年に作られたもので、必ずしも現在に適応するものではありません。「決議 23－34」の原則を破ったからこそポリオ根絶運動で大きな成果が生まれたという見方もできます。しかし、これを失い、この内容を理解していないロータリアンが増えていくことは、ロータリーが活動の指針を失うことになります。従って、ロータリーの奉仕理念を明確に定めた「決議 23－34」は、その制度疲労を理解し、うまく時代にアジャストさせながらも、ロータリーの奉仕理念の原則として守り、ロータリアンに伝えていかなければなりません。そして、この役割を担っているのは各ロータリークラブのロータリー情報委員会であり、理事会なのです。

各クラブは、このような研修などで「一般奉仕概念」を正しく会員に伝達しながらも、「決議 23－34」に矛盾する RI 主導型奉仕にも、その矛盾を理解した上で最大限協力するという姿勢が必要です。

以上、ロータリーの大原則である「一般奉仕概念」についてお伝えしてきましたが、最後にもう一度、重要な点を強調して今回の研修を終わります。

「一般奉仕概念」は、1908 年にシカゴロータリークラブに入会したアーサー・フレデリック・シェルドンが発案し、1923 年に採択された「決議 23－34」によって公式にロータリーの奉仕概念になり、現在でも有効です。それは、まず例会で「人に優しくする心」すなわち「奉仕の心」を養い、それをまず職場で発揮し、さらには職場以外のクラブや家庭や社会で発揮するというものです。現在の「五大奉仕」は「一般奉仕」を制度的必要性から分類したに過ぎません。このような「一般奉仕概念」は RI 主導型の奉仕活動が始まって以来、ロータリアンの目に付きにくい状況におかれることが多くなっていますが、クラブの責任として、会員に正しく伝えることが非常に重要になっています。その上で、RI の主導型の奉仕に関しては、その矛盾を寛容の精神で許し、最大限の協力をしていくという姿勢が現在のロータリーには必要です。

皆様自身が「一般奉仕概念」をしっかり理解すると共に、未来の新会員のために、クラブがこれを正しく伝達することを継続していくよう、これから各役割の中で努力していただければと思います。

ご静聴ありがとうございました。